

I. 今回の信徒講座の目的

役員の新規任職・就職と再教育、役員候補者のために。

II. 何が教会か？教会とは何か？

1. 神の宝の民

・申命記「7:6 あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。7:7 主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。7:8 ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。

2. キリストの体、神の家族、霊の住まい

・被造物の中で、教会だけが「キリストの体」とされている。コリントの信徒への手紙 I 「12:27 あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。12:28 神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、次に奇跡を行う者、その次に病気をいやす賜物を持つ者、援助する者、管理する者、異言を語る者などです。12:29 皆が使徒であろうか。皆が預言者であろうか。皆が教師であろうか。皆が奇跡を行う者であろうか。12:30 皆が病気をいやす賜物を持っているだろうか。皆が異言を語るだろうか。皆がそれを解釈するだろうか。12:31 あなたがたは、もっと大きな賜物を受けるよう熱心に努めなさい。」

・エフェソの信徒への手紙「2:19 従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、2:20 使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、2:21 キリストにおいて、この建物全体は組み合わされて成長し、主における聖なる神殿となります。2:22 キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。」

3. 教会の属性論

教会の属性論とは、キリスト教史初期にもたらされた、最古のかつ公の教会に対する定義である。

・使徒信条：「われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会」

・ニカイア・コンスタンティノポリス信条 (The Nicene Creed, as Enlarged A.D. 381.)：原ニカイア (325 年) にあった呪詛 (アナセマ) が削除されている。原ニカイアのキリスト論、非アリウスの、養子論的モナルキア主義の否定とホモウシオスの保持に加えて、聖霊論 (カパドキアの三教父による) が拡充されている (原ニカイアでは、「聖霊を信ず。」という言葉しかなく、そこで本文は終わっていた。)。よって、ニカイア・コンスタンティノポリス信条によって、はじめて教会が定義された。聖霊が生きて働く場としての教会の認識。これは、教会というものを考えるうえで、画期的なことだった。

・9 条：「And [I believe] in one holy catholic and apostolic Church. (ひとつの、聖なる、公同の、使徒的教会)」

・ローマ・カトリックは、自己弁護と自己正当化のために、これらの属性を直接自らの教会に当てはめてきたが、プロテスタント教会は、これらの教会の属性を、神の賜物として、同時に、それを目指して不断に自己形成をしていく目標として、さらに、霊的（可視的ではなく）な現実を示すものとしての信じる対象として受け取ってきた¹（RD6, 110-111）。

・「我々は四大属性の意味内容に関して、基本的には宗教改革者たちの見解に沿って理解したいが、しかし、教会の今日的な議論をなすに当たり、今日の教会内外の諸事情を十分に汲んで、その意味内容を（変質や転換ではなく、いわば）補充し、昇華させなければならない。」（RD6. 112）

・（現代の状況においては）使徒性こそが最重要の属性である。（RD6. 112 下段）

4. 真の教会のしるし

教会のしるしとは、教会についての定義のひとつであり、見える経験的な教会が、真に見えない教会と一致する教会であることの保証はどこにあるのか？という関心から生まれた、見える教会が見えない、真の教会に連なるための必要条件のことを言う。

教会のしるし論は、より古い、教会の属性の議論を教会論から締め出すものではない。両者は矛盾せず、補完し合う概念である。教会の徴の一つとされる御言葉の純粋な説教なしには、教会が、一つなる、聖なる、公同的、使徒的教会となりうることはできない。同じく教会の徴として理解されている食卓の交わりと一つの洗礼という礼典なしには、教会のいかなる公同性もない。しかし、その場合に、逆も妥当する。すなわち、一体性、神聖性、公同性および使徒性なしには、いかなる純粋な宣教もないし、 sacrament のいかなる正しい使用もない。ここには排他的関係があるのではなく、相互の補完があるだけである。

周知のように、教会史において、しるしの議論は属性の議論よりも歴史的に後に位置しており、それは宗教改革期に生じた。その前の時代には、ローマ・カトリック教会以外にキリスト教会は存在しなかった故、真の教会を示すしるしの議論は不問であった。その意味で、しるしの議論は、可視的・不可視的教会の議論と共に、その可視的教会内における、真の見えない教会に連なるための実践の厳密化という文脈において生じた。

（1）見える教会と教会のしるしの関係について

①岡田稔：

「ローマは見ゆる教会と見えない教会との区別を知らなかったのですが（ルターが初めてこれを主張したのですが）、例によってルターの表現は大まかで、どこか、両者を別な二つの教会と見ているようで、可見教会のうちにある不可見教会といった感じを与えます。が実際は、ひとつの教会の見ゆる面と見えぬ面というつもりだったのです。特にカルヴァンと改革派教会においては、この二つの呼び方は本来元々地上の（戦闘の）教会について言っているのであって、地上に存在する教会が一方見える教会であるとともに他方見えぬ教会でもあることを主張しようとするものであります。そしてこのことを主張しなくてはならなかった直接の理由は、ローマが法王制に立つ、制度としての見ゆるローマ・カトリック教会そのものに聖なる栄光を帰していることに対する批判上必要だったのでありまして、聖書が教会を聖なる教会とする時、それは、不可見教会に対して与えられている栄光であるからです。しかもこの不可見教会があくまで可見教会とは別なものであるのではなく、それは一定の方法によって見ゆるかたちをとるものであります。ここにあとで述べるマークス。標識の問題が出てくるわけです。」²

¹ 市川康則『改革派教義学〈6〉教会論』（神戸改革派神学校、2014年）（以下、RD6）

² 岡田稔『キリストの教会』（東京：小峯書店、1960年）、37頁。

②ハンス・キュンク：

「一性、聖性、普遍性、使徒性の四つがそなわれれば、それで果たして真の教会だということができるものだろうか。教会に逸脱現象や狂信的な運動や異端が生じたこと、否、偽教会の生まれる危険さえあったことを考えると、こういう問いを頭から不当な問いとして斥けることはできない。それどころか、真の教会はどこにあり、どんなものかという問いは絶えず新しく提起され、解答を要求する。確かに真の教会は、信仰の対象であり、信じる人々のための信じる人々の教会であって、そのありようを正しく認識できるのは信仰の中においてだけである。しかし、まさにこの教会についてその正当性がどこにあるのかを問うことが許されもし、必要でもある。…宗教改革者たちは、教会の四つの特性（ニカイア・コンスタンティのポリス信条）を否定はしなかった。つまるところ、彼らは古代教会の信仰宣言文を堅持していたのである。しかし、各地の教会の現実と、教会の改革と言う観点から見て、右の特性とは少々別個の事柄が決定的であると思われたのである。彼らも、真の教会はどこに見出されるかと問うのであるが、神学的であると同時に論争的でもあるその答えは、福音が純粹に教えられ、秘蹟が正しく執り行われているところがそれである、というものであった。」³

（2）教会のしるしについての諸見解

何が真の教会のしるしに含まれるのかについては、改革派陣営においても見解の相違がある。⁴

- ・御言葉の純正な説教のみ：ベザ、エイムズ、ルターによるシュマルカルデン条項（1537年）⁵、ハイデルベルク信仰問答⁶
- ・御言葉の純正な説教と礼典の執行：カルヴァン、カルヴァンによるフランス信条（1559年）⁷、メラン

³ ハンス・キュンク『教会論・下』石脇慶総、角田信三郎訳（東京：新教出版社、1977年）、4-5、9頁。

⁴ RD6、133-134頁。

⁵ シュマルカルデン条項（マルティン・ルター）1537年。〔教会について〕我々は彼らに対して、彼らが教会であることを認めない。また、事実そうではない。また、彼らが教会の名において命じ、また、禁じることを聞こうと思わない。なぜなら、神に感謝すべきことに、七歳の子供でも、教会とは何であるかを知っているからである。すなわち、教会は聖なる信仰者であり、「羊飼いの声を聞く羊」である。子供たちは「私は聖なる、キリスト教会を信じる」と祈るからである。この聖さは、彼らにより聖書に勝るものとして考案された、式服や剃髪や長い祭服や、その他の儀式によるのではなく、神のみことばと真の信仰とによるのである。

⁶ ハイデルベルク信仰問答（ツァハリアス・ウルシヌス）1563年。第54問〔聖なる公同のキリスト教会について、あなたは何を信じますか？〕答：神の御子が、全人類の中から御自分の群として選び、永遠の生命にさだめたもうた者たちを、御霊と御言葉によって、まことの信仰の一致のうちに、世の初めから終わりに至るまで、集め、守り、維持してくださるということ、また、わたしはその生きた肢であって、永遠にかかわらずそうだという事です。

⁷ フランス信条 第27条〔真の教会〕しかしながら、われらは注意と思慮をもって何が真の教会であるかを見分けることが大切であると信じる。なぜならこの名称はあまりにも乱用されているからである。そこでわれらは、神の言葉にしたがって、それは信徒の団体であるという。かれらはこの御言葉とそれにもとづく正純なる宗教に従うことに同意する。しかしわれらは信徒のなかに偽善者および悪人がいないということを否定しないが、彼らの悪意も教会の名誉を無効にすることはできない。

第28条〔偽りの教会〕この信念のもとに、われらは、適切に言えば、神の言葉が受け入れられないところ、またそれに服従することを公言しないところ、また聖礼典の慣例をもたないところには、教会はないと判定することができる。ゆえに、われらは教皇の集会を非難する。

ヒトンによるアウグスブルグ信仰告白（1530年）⁸、マルティン・ブツァーによる四都市信仰告白（1530年）

・御言葉、礼典に教会訓練を加える：ブツァー、ブリンガー（第一・第二スイス信仰告白（1562年））⁹、ウルジュヌス、ア・ラスコ、スコットランド信条（1560年）¹⁰、ベルギー信仰告白（1561年）¹¹

・ルターにおける真の教会のしるし

1539年の『諸公会議と諸教会』においては、①真の神の言葉が説かれていること②洗礼が正しく授け

⁸ アウグスブルク信仰告白（フィリップ・メランヒトン）1530年。第七条〔教会について〕また、こう教えられている。すなわち、すべての時に聖なるキリスト教会は存在し、存続しなければならない。教会は信仰者の集まりであって、そこにおいて福音が純粹に説教され、聖礼典が福音にふさわしく差し出される。そして、キリスト教会の真の一致のためには、福音が正しい理解に基づいて説教され、聖礼典が神のことばにかなって差し出されることで十分である。キリスト教会の真の一致のためには、人間によって定められたあらゆる類の、同じ形の儀式が保たれることは必要ではない。パウロがエフェソの信徒への手紙第四章で「ひとつのからだ、ひとつの霊、あなたがたがあなたがたの召しのひとつの望みに召されているのと同様である。ひとりの主、ひとつの信仰、ひとつの洗礼」と言っているとおりである。

⁹ 第一スイス信条（ハインリヒ・ブリンガー）1536年。第15条〔教会について〕我らは次のことを主張する、すなわちこの生ける岩の上に建てられている生ける石からキリストの花嫁である聖なる公同の教会、すべての聖徒の交わりと会衆とが、打ち建てられ、集められること、この教会をキリストは自らの血によって清め、ついに父のみ前に汚れなきまっさき清浄さにて現わし給うと。このキリストの教会また会衆は、神の目にのみ明らかであり、知られているのであるが、この教会はキリスト自らによって制定され組織立てられている外的なもろもろの、徴と儀式と秩序とにより、神の言葉により、また普遍的な公の整然たる訓練によって見られ、知られるのみでなくまた集められ、建てられるのである。それゆえにこれらの事柄なくしては〔正式に言えば、神によってあらわされた特別なる、自由なしには〕何人もこの教会に属するものとしてとらえられないのである。

¹⁰ スコットランド信条（ジョン・ノックス）1560年。第18条〔何によって真の教会はいつわりの教会から区別せられるのか、教会の教義の正しい判断は何であるかということについて〕神の真の教会の徴は、神の言葉の真の宣教であると我らは告白し確信する。預言者と使徒の書が宣ぶごとく、神は神の言葉の中に自らを啓示したもうのである。第二にキリスト・イエスの聖礼典の正しき執行である。それにより人は神の言葉と約束とに結合せられ、心の中にそれを銘記するのである。最後に教會的訓練が正しく行われ、神の言葉から規定せられ、それによって悪徳が抑制せられ、善き行いが養われるのである。これらの徴が見られ、いかなる時にも、二三人の僅かな人々によらず、多くの人々に守られているところに、疑いもなく真のキリストの教会があるのである。キリストはその約束により、それらの教会の中にいましたもう。

¹¹ ベルギー信条（ガイ・デ・ブレイ）1561年。第29条〔真の教会のしるしについて〕真の教会を認識するためのしるしは次のとおりである。教会が純粹なる福音の教えを説いているかどうか、キリストの命じたまいしごとき純粹なる礼典を授くるかどうか、教会の訓練が悪徳を是正するために用いられるかどうか、簡単に言えば、人が純粹なる神の言葉によって身を修め、イエス・キリストを唯一の首長と認め、神の言葉に反対する一切のものを排斥するかどうかである。それによって人は真の教会を確実に認識することができるし、また何人も教会から離反する権利を持たない。偽りの教会については、それは神の言葉よりも自らとその規約に多くの権威を帰する。それはキリストのくびきに従うことを欲しない。それはキリストがその言葉によって命じられたように聖礼典を授けない。思いのままに加減する。それはイエス・キリストよりも人に信頼する、神の言葉に従いつつ聖く生きるもの、またかれらの悪徳、貪欲、偶像崇拜を咎めるものを迫害する。これら二つの教会はそれぞれたがいにたやすく認識することも区別することもできるのである。

られること③聖餐の正しい形式④罪を赦す権能（かぎの権威）⑤役務者の適法な選定と叙階⑥母国語における祈祷と詩編の朗読⑦迫害。1541年の『ハンス・ヴォルストに対して』では、①洗礼②聖餐③かぎの権威④説教の務め⑤使徒信条⑥主の祈りを始めとする祈り⑦この世の権威の尊重⑧結婚⑨兄弟たちと共に苦しむ十字架⑩復讐しないこと、忍耐⑪断食。が挙げられている。¹²

・カルヴァンにおける真の教会のしるし

「神の御言葉が真摯に宣べ伝えられ、そしてそれが聴聞される場所、また、聖礼典がキリストの制定によって執行されるとわれわれが見るところならば、いずこであろうと、神の教会が存在することは、いかにしても疑いえないのである。なぜなら、「ふたり、または三人がわたしの名によってあつまる場所、その中にわたしがいる」とのキリストの約束は、あざむくことができないからである。…もし、彼らが御言葉に仕えるつとめをたてており、その務めを重んじており、また、聖礼典を執行しているならば、それは、疑う余地なく、正当に、「教会」とみなされ、信じられるべきである。御言葉と聖礼典とが実を結ばぬことがないのは確かだからである。」¹³

これにプラスして、御言葉と聖礼典を正しく執行するための「戒規」が両者に従属的で不可欠な要素とされている。「牧師は教会の先に立つものではあるが、それは何もしないで、威厳を帯びるためではなく、キリストの教理をもって民らを教えて、真実の敬虔に至らせ、聖なる礼典を執行し、[イエス・キリストの定めたもうた]正しい戒規を保ち、かつ実施[して、かれらの過失を行きとどいた説諭によって矯正]するためである。」¹⁴

・ブツァーにおける真の教会のしるし

「われわれはすべてキリストにあって真に一つとなるキリストのからだであり、また互いにキリストの肢体であって、その真の交わりを御言葉、 sacrament、キリスト教的訓練、さらに信仰の仲間とあらゆる人々に示すべき霊肉に関する一切の助言と助力によってなすのである。本書の第一章は以上のことを教えている。」¹⁵

※宗教改革時における教会訓練の強調の起源は、バーゼルにて活躍したエコランパディウスに求めることができる。彼は1530年に『破門の回復に関する説話』を著し、その影響はブツァーと（1538年の『牧会論』）、またブツァーを経由しつつ、ストラスブール滞在時のカルヴァンに及び、それがカルヴァンのジュネーブでの第二回改革開始時における『ジュネーブ教会規定』（1541年）につながっている。

・モルトマンの現代的課題としての教会のしるし

「われわれは、教会の標識を内側に向けて、御言葉と sacrament から理解することができるだけでなく、むしろそれらを、同様に外側に向けて方向づけ、世界との関係の中で理解しなければならない。それらは、教会の内側の活動のために重要であるだけでなく、さらに世界の中での教会の形態の証言のためにもっと重要なのである。その場合、教会の標識は、今日、人類を実際に分裂させ、分離している諸葛藤の中での信仰告白のしるしになる。したがってわれわれは、ひとつなることへ方向づけられた伝統の教会論を、今日の世界状況の中での葛藤に対して方向づけられた教会論へ拡大するのである。」¹⁶

→自由と平和という方向性への一致というしるし理解。

¹² 石居正己『教会とはだれか：ルターにおける教会』（東京：リトン、2005年）、27頁。

¹³ カルヴァン『キリスト教綱要』IV-1-9

¹⁴ カルヴァン『キリスト教綱要』IV-3-6

¹⁵ マルティン・ブツァー「牧会論」南純訳『宗教改革著作集6』（東京：教文館、1986年）、227頁。

¹⁶ ユルゲン・モルトマン『聖霊の力における教会』喜田川信、他訳（東京：新教出版社、1981年）、474頁。

⇒伝道、単なる社会的活動ではなく、それを神の国の進展に結びつけて実践していく神学、これも現代的なしるしになりうるのではないか。→そこでは終末論的「しるし」との区別性が大事になってくる。

Ⅲ. 第一義的なしるしとしての御言葉

宗教改革者が抗カトリック的な意味で主張した、真の教会のしるしとしての御言葉の純粋な説教とは、何を意味するのか？

宗教改革における聖書解釈の原理としての、「ソーラ・スクリプトゥーラ」(Sola Scriptura 聖書のみ)と、「トータ・スクリプトゥーラ」(Tota Scriptura 聖書全体)。宗教改革者たちは当時のカトリック教会の外典・聖伝・教導職の権威視と使用に抗して、正典のみの独占的権威を主張したが、同時に、特に改革派の伝統は、まんべんなく、また偏りなく、聖書の全体を神の言葉として権威あるものと強調した。プロテスタント他派に勝って、特に聖書全体を強調する改革派においては、聖書を全体として受け取り、その諸部分を、またその使信内容の諸側面を教理体系として、有機的、統一的に理解すべく努めるのである¹⁷。

この論点の教会における具体的適用について、岡田稔はこう述べている。「先ず第一に、聖書の真理の統一的な見解を教会の言葉で告白し公然と表明することの必要であります。これが申すまでもなく信仰の告白即ち信条であります。コンフェッションとは、聖書の啓示に一致して、教会全体が口を揃えて告白する意味であると思います。“聖書を神の言葉と信じる”というだけでは、意味がありません。“どういう意味内容をもつものと信じるのか”ということが明らかに公言せられることが必須です。ウォーフィールドが「聖書とは聖書の文字でなく聖書の意味である」と語った真意を明らかにするには、カルヴァンの綱要第4巻第8章16節の文章がやくだつでしょう。…聖書を信じるということは、地上の教会のマークとしては、聖書の真理を公然とした信条において告白するという以外には意味がないのであります。

しかし第二に、教会が固定した信条を持っているというだけでは、マークとしての実益はありません。それは常に教会の公の集会で説かれていなければなりません。信条は、教師の口から絶えず説教せられるところの聖書解釈と一致し、それを導き、それによって肉付けられていなければなりません。その教会の神学は、その教会の信条をいよいよ深く聖書に根差すものとして解明するとともに、その教会の説教は、その信条を常に、聖言によって正当であることを実証するものでなくてはなりません。ここに信条の改定とか新信条の作成という重大問題が生じますが、この点紙数の関係上、他の機会に譲ります。…第三に、教師が説く聖書の説きあかしが、如何に聖書的であったからといって、そこに教会があるというのは早計であります。なぜなら教える教会が教会でなく、聖徒の交わりが教会だからです。それ故に、集会に集まる信者たちが、〔特に公的礼拝において〕その心に、説かれる御言葉を、神の言葉、羊飼いの声としてきくことが出来なければ、まだそこに教会があるとはいえません。有力な宣教師が未開拓の伝道地で、説教を定期的に始めたとして、多数の求道者らが毎集会に席を満たすに至っても、まだ教会がそこに存在するというわけではありません。この会衆の中に、二、三人でもそれを神の言葉として信仰をもって受け入れる聴衆ができるまでは教会ではありません。そしてその群れが長老を選出して自治の団体を形成する時、はじめて地上的な制度を持つ教会が出現するわけです。」¹⁸

1. 聖書論の重要性

我々が信仰規準として採用しているウェストミンスター信仰告白の第一章「聖書について」の重要性。

¹⁷ 市川康則、RD6、137頁。

¹⁸ 岡田稔『キリストの教会』、60-63頁。

とりわけ 9 節の「聖書解釈の誤ることのない基準は聖書自身である。それゆえに、聖書の度の箇所でも、その真の十全な意味（それは多様ではなく、一つである）について疑問があるときには、より明瞭に語っている他の箇所によって調べて知るようにしなければならない。」という言葉に、我々は良い意味で規定されなければならないと言える。

2. 80 周年宣言の三次草案よりの引用

II – (3) 「神の国」と信仰告白

「神の国を神学しよう！」

神学に励むことは、私たちの使命であり喜びです。教会の手で神学的に掘り下げられることによって、「神の国」はその姿を鮮やかに示します。特に私たちは、ウェストミンスター信仰規準を教会憲法として採用する信条教会として、歴史的改革派諸信条に表された改革派神学に軸足を置き、その伝統を十二分に用いつつ、常に新しい言葉をもって信仰を告白し続けます。さらに私たちは、教会の実践に繋がる生きた神学を意識しつつ、新信条の作成というヴィジョンをも保持します。

私たちは、この神学的伝統を用い、改革派諸信条の聖書論に堅く立って旧新約聖書を一貫性をもって理解し、御言葉から右にも左にも逸れず、さらに何一つ加えることも、減らすこともしません。そして聖書全体からイエス・キリストの福音を豊かに引き出しつつ、自らを聖書の言葉に基づいて改革し続けます。その際に、聖書が語らず神から来ない世の教えに対しては、迫害や同調圧力に屈することなく抵抗し、聖書から導き出される「神の国」の神学に堅く立ちます。

FOR HIS KINGDOM！神の国を今ここに！

3. 執事職が立てられた聖書的経緯

- ・使徒言行録「6:1 そのころ、弟子の数が増えてきて、ギリシア語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人に対して苦情が出た。それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。6:2 そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉がないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。6:3 それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。6:4 わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」
- ・表の意味としての、日々の分配を行い、食事の世話をするという働きは、しかしその究極の目的としての、教会の御言葉による建設と一致を目指していた。それは、神の言葉を使徒たちがないがしろにしないで、彼らをその働きに専念させることのためであり、教会の中での分業や分担の究極目的は説教と礼拝の健全な維持のためであった。この執事職擁立の経緯には、御言葉を高く掲げる熱心が強調されている。
- ・執事職は決して単なる世話役ではない。執事が立てられた際の聖書的な原理は、御言葉を高く掲げるということであり、執事の賜物、人数、人選、執事会の議論の方向性は御言葉を尊ぶ方向へと常に向かうべきである。そのことが神様の御心に導かれる教会を造り上げる。この時選ばれたステファノやピリポは、説教者、伝道者、としての働きもしており、彼らの働きは広汎にわたっている。

4. ディアコニアについて

I – (2) 「神の国」とディアコニア

「神の国を世界に取り戻そう！」

神は極めて良かった天地創造の世界を、この世界に取り戻されます。神は、教会の枠組みを超えて世界に「神の国」を回復されます。私たちは、イエス・キリストの福音を語るだけでなく、愛をもって仕える奉仕の業（ディアコニア）を重視し、正義と平和が実現した終わりの日の「神の国」の完成に向けて積極的に奉仕します。なぜなら救いは、心の中だけでなく、私たちの具体的な生活や社会にまで及び、世界を「神の国」に近づけ、神の御心に適う世界へと変えていく力でもあるからです。

この世界の弱い立場に身を置き仕えることは、キリストに倣う教会の本質であり、その働きは、教会外の人々とも協力してなされるものです。この世界において災害や不公正によって痛みを負い、失望に囚われた人々の間であって、教会は、自ら低くなり人の病を担われたキリストの「神の国」を身をもってあらわします。

ディアコニアは慈善や公共の福祉それ自体を目標とすることを越えた、神への奉仕の業です。ディアコニアとは、復活の主イエス・キリストが打ち建てられた「神の愛の国」を、教会を超えた大きな枠組みでこの地に実現・回復させる働きなのです。

FOR HIS KINGDOM！神の国を今ここに！

IV. 礼典の合法的な実施について¹⁹

礼典の合法的実施とは何を意味するのか？何をもちて礼典は合法的とされるのか？礼典の根拠は、キリストが教会にそれを為すように制定されたというキリストの制定にある。つまりそれは、キリスト御自身の直接の意志と命令を受けて、キリストの贖罪を提示・提供するために行われるものである。

また礼典の合法性を考える際にもう一つ重要なことは、それが御言葉の説教と結び付いていることである。礼典が礼典それ自体で存在していても、それが何で、何を意味し、それがどのように信者にとって益となるのかが明らかにされなければ、そこに聖霊が働いていることを信じることができるにしても、その効力は十分に発揮されない。

さらに、礼典の正当性については、それを行う礼典執行者に対する、教會的な資格付与が重要事項となる。神と民との間に立てられた正式な祭司としての礼典執行者の存在が、礼典執行の正当性を担保する。

新約聖書は、キリストの贖罪恩恵の伝達・確証手段としての礼典に、洗礼と聖餐の二つだけを教えている。即ち、ローマ・カトリックが保持する洗礼と聖餐以外のものをも秘跡とする実践は、聖書由来のものでない。

V. 戒規の忠実な行使について²⁰

戒規とは、Discipline のことを指す。よってそれは、教会訓練という日本語で置き換えられ語られる方が、原語とまた原意に忠実である。戒規は、日本語としては懲罰的な意味合いをもつものとして受け取られるが、Discipline は単純に戒規と言う日本語でイメージされる内容と同等ではない。

Discipline は単純に制裁と矯正のためのものではなく、そのような事柄を結果として導くことがあるにしても、それは本来的には教会政治制度の文脈における、キリストの教会をそれにふさわしく治めるためのものである。よって、RD6、142 頁の「戒規の目的」の項は、破門、除籍、訓戒などの、教会訓練の中における懲罰的、また矯正的な側面について、それがどのような目的のもとに為されるのかを述べているものと理解するべきである。

¹⁹市川康則、RD6、138-141 頁。

²⁰市川康則、RD6、141-143 頁。

1. 教会訓練における長老主義の採用

「80周年宣言」 II—(2) 「神の国」と教会政治

「神の国を映し出す教会になろう！」

「神の国」を教会に実現させるために、聖書から引き出された教会政治制度が、長老主義政治です。それは権威を一人に集中させず、独断ではなく会議によって合意を形成し、聖書に基づく教会規程を共有する政治です。

会議による合意形成とは、少数者の意見を重んじるということです。私たちは、力に乗じた不平等と嫌がらせ（ハラスメント）がはびこる世界に反対します。一人一人の意見や個性を尊重し、個々の違いを、問題や対立としてではなく豊かさとして受け取ることで、多様性と一致の両立を目指します。私たちは、この長老主義政治を用いて、教会のすべての営みの主語に主イエス・キリストを置く教会の実現を追求します。

特に私たちは、中会を形成する諸教会をひとつの教会と捉え、その交わりの中で互いに成長し、「神の国」の輪を広げてゆきます。中会は枝々である各個教会を支える大きな幹です。さらに中会は大会の枠組みの中で互いに親しく交わり、共に働くことで、「神の国」の広がり豊かさにあずかるのです。私たちはこれからも、大・中会の良き交わりによって互いに育み合いながら、長老主義政治を通して「神の国」をこの地に映し出す教会となります。

FOR HIS KINGDOM！神の国を今ここに！

- ・長老主義は究極のチームプレーであり、我々はその先に「神の国」を見る。
- ・宣教教師自身と伝道所のためにも、小会を形成し、この長老主義政治を機能させるという方向性を失わないようにしたい。

2. 「教会規程」より

- ・第二条（教会）「主イエス・キリストが、御自身の民を集め、これを全うするために、この地上に立てられた行動の教会は、見える恩寵の王国（Kingdom）であり、いつの時代にも同一である」
- ・第五条（教会会議）「教会の法治権（議会権能）は、小会・中会・大会において、議員である教師と治会長老が行使する。各会議は、その固有の権能を持つが、相互関係は失われることなく、全教会の一致の精神を実現している。」
- ・第七条（長老政治）「以上の聖書的教理である教師と治会長老による政治は、見える教会の存在にとって本質的なものではないが、その秩序の完成のために必要である。」

VI. 「神の国」の神学（論理）を把握する

1. 教会が「見える恩寵の王国」となるために、実現すべき「神の国」の逆説

- ①第一位の排他的プライオリティを持つ「神の国」。「神の国」を求めることこそが、全ての解決の究極の糸口であり解決方法²¹。
- ②人間の富では不可能な救いを可能にする「神の国」²²。

²¹ マタイによる福音書「6:33 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」

²² マタイによる福音書「19:24 重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」19:26 イエスは彼らを見つめて、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と言わ

- ③「神の国」における、価値観、力、世のあらゆる要素の逆転²³。
- ④律法を遵守できない罪人である子どもこそが入ることのできる「神の国」²⁴。
- ⑤終末論的な、世の国を超越した「神の国」²⁵。
- ⑥報いと祝福に溢れた「神の国」²⁶。
- ⑦求めれば与えられる。儚い夢でなく、確かな希望である「神の国」²⁷。
- ⑧世の国を超えた「神の国」の包括性と偏在性²⁸。
- ⑨新しいパラダイム、生まれ変わるに等しい新しい生と世界のあり方としての「神の国」²⁹。
- ⑩後の者が先になり、先の者が後になる「神の国」³⁰。
- ⑪貧しい者、迫害の痛みを負う者こそが入ることのできる「神の国」³¹。
- ⑫「神の国」において命を得る方法、それは命を神にささげ失うこと³²。
- ⑬荒れた状態のこの私たちの心を神様はご存知だが、神は 100 倍の実りをもたらず御言葉をそこにまくことをやめない³³。

れた。」

²³ マタイによる福音書「21:42 イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、／わたしたちの目には不思議に見える。』 21:43 だから、言うておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。」

²⁴ マルコによる福音書「10:14 しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」

²⁵ マルコによる福音書「14:25 はっきり言うておく。神の国で新たに飲むその日まで、ぶどうの実から作ったものを飲むことはもう決してあるまい。」

²⁶ ルカによる福音書「7:28 言うておくが、およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない。しかし、神の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」

²⁷ ルカによる福音書「12:31 ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。 12:32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」

²⁸ ルカによる福音書「17:20 ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。 17:21 『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

²⁹ ヨハネによる福音書「3:3 イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」 3:4 ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますよう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」 3:5 イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。」

³⁰ マタイによる福音書「20:1 「天の国は次のようにたとえられる。ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。 20:16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

³¹ マタイによる福音書「5:3 「心の貧しい人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」 5:10 義のために迫害される人々は、幸いである、／天の国はその人たちのものである。」

³² ヨハネによる福音書「12:24 はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。 12:25 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」

³³ ルカによる福音書 8章 4～15節 「種をまく人のたとえ」

⑭実のならないいちじくの木を主は切り倒さず、御自分の体を張ってかばってください³⁴。

2. 「神の国」のパラダイム（ものの考え方捉え方）で教会の成長を捉える。

- ・教会の目的は「神の国を今ここに」実現することである。そして、神の国を今ここに実現する教会の、「神の国」についての実りと成長は、この世の国が求める成長と、その指標においても、実現の仕方においてもイコールではない。
- ・「神の国」は、持っているものを手放し、神に捧げることで、得られ、獲得できる。
- ・貧しく、空っぽになることで、しかし逆に満たされるということがそこでは起こる。
- ・古い言葉の使用を乗り越える。たとえば教勢、世代間ギャップ。教会の内と外、改革派的、大教会、小教会、高齢化、少子化、など。
- ・「神の国」語で、「神の国」アタマで、「神の国」の価値観で、考え行動することで、教会を「神の国」基準の「見える恩寵の王国 (Kingdom)」とする。
- ・それはカウンターカルチャーというよりも、世のカルチャーを超越した「神の国」の文化に生きること。
- ・そこでの成長とは、「神の国」のリアリティーについての目がどれだけ覚めており、冴えているかということであり、「目を覚ましていなさい」とは、どれだけ「神の国」に目が開かれているか、また、私たちの目に主イエス・キリストがどれだけハッキリ見えているかどうかを問う言葉である。それは、「神の国」の完成の勝利の約束と確信から来る希望をもって生きることができるかということであり、聖書のどこをいつ読んでもそこに神の愛の本姓を読み取れる状態を指すということができる。

3. 世の国との違いを役員会に、そして教会に反映させる³⁵

³⁴ ルカによる福音書「13:7 そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』13:8 園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。13:9 そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

³⁵ 「10. 職務と権威

諸職務はすべて、教会を建て上げ、またそのメンバーたちを神の栄光に向かって導くという目的のために、聖霊をとおして私たちに与えられている。主イエス・キリストの権威と聖霊の御力は、教会内、そして世界の中での忠実な奉仕のために、人々を職務に召し出したのである。しかし、すべての職務は、誤解や、あるいは福音を否定するような権威と力の誤用によって、乱用される危険性がある。職務の真実の目的を成し遂げるといことは、第一に、個人的信仰と、教会のコンテキストの中での、責任にかんする問題であるが、さらに語られるべきことは、職務の実行が、おのおのの社会の中で、社会的、政治的、経済的、また文化的諸要因によって影響されるという事実である。この諸要因を理解し、それらに自覚的に向き合うことが大切である。そこでは次の両極端が避けられなければならない。一方の極端は、イエス・キリストにある信仰は自動的に私たちに自由にし、権力の乱用という誘惑からも免れさせてくださるだろうという無垢な前提のもとで職務に当たることであり、他方の極端は、教会といえども所詮は他の権力集団となら変わるどころがないという、すねた態度で職務を捉えることである。

権威乱用の危険性は、状況によっても異なってくる。それぞれの背景のなかで、そこで作用する諸要素の注意深い分析が必要とされている。

権力の乱用に対して絶対に安全な組織というものは存在しない。教会とその諸職務は、その召命に対して忠実であろうと聖霊の御力に依り頼んでいる。しかし、その権力が及ぼす影響力に制限を設けている組織がある。

①山崎龍一「教会的なものの見方を身に着ける：教会での奉仕の忠実さ、あるいは目に見える部分での熱心さで把握、日頃の言葉遣いや人格からキリスト教的価値観が溢れていることが、役員としての『模範』の第一歩になります。前出の学生たちの言葉を翻訳すれば、『教会の大人たちは熱心に奉仕をしているし、人柄は素晴らしいのだけれど、いざ就職や仕事の話になると、その部分ではこの世の価値観や常識によって生きていることが、伝わってしまう』ということなのです。つまり自分のこの世における人生観を変えずに、信仰を内面の平安に留めてしまっていることが伝わり、福音理解の狭さが問われているのです。

役員にとって大切な奉仕は、語られる説教を聴き、牧師を支え、教会のために重要な決断をし、その決断については言葉を整えて教会員に説明することです。一つの決断に相反する意見が織りなす教会内を見渡しながら、主のみ心は何かを祈り求め、牧師の判断を尊重しつつ、教会に仕えることです。

決断のときに問われるが信仰にもとづく価値基準です。決断するとき、考えるべきことが二つあります。一つは価値基準がキリスト教的世界観に則しているかということ、もう一つは人間関係や常識などを重視して決断が鈍っていないかということです。教会的な決断を下すために、役員は聖書と教理を学び続ける

そしてまさに長老職こそが、そのような組織なのである。それは協働的な職務として、個人による統治や支配を防止するが、それにもかかわらず、長老職は、以下のような多様なしかたで腐敗させられ、損なわれてしまう危険性がある。

-長老たちは、牧師や諸教会の権限に対して実質的なリーダーシップを担う責任を、放棄してしまう恐れがある。

-長老たちは、牧師と協力して福音宣教に尽力する代わりに、権力を追求する危険性があり、また牧師たち（また執事たち）を支配してしまう可能性もある。

-長老たちには、教会で第一位を占めるキリストの権威を認めることのない、偏狭な支配集団になり変わる危険性もある。教会を元気づけ、深い関心を表すことをせず、反対に教会活動への教会員の意欲的な参加を妨害する可能性もある。

-長老たちは皆、実社会での立場をもっている。社会での彼らの役割は、彼らの職務活動に必ず影響する。長老たちの日常生活での経験や付き合いは、教会での職務に大きな豊かさをもたらしている。なぜなら彼らは、教会がそこにふれることのできないような、教会員たちの日常生活を理解し、そこに参加することができるからである。しかしながら、この影響力は、少なくとも以下の二つの点で、その職務のはたらきへの障害にもなりえるのである。

a) 彼らの日常生活での経験に基づいて、長老たちは、福音的精神とは無関係の教会の種々のはたらきに、たとえば、効率の良さへといたるような方法や、また、産業界を導くような成功概念などを取り入れるという、誘惑に襲われるかもしれない。

b) もし長老たちがある種の利益団体や、社会的な権力構造に関与しているならば、教会が福音に対して忠実に語り、また、行動することを妨げたくなる誘惑を受けるかもしれない。たとえば、長老たちが特定の富裕層を代表していたら、反対に隅に追いやられ、抑圧されている人々の側に立つことを、きっと好まないだろう。

おのおのの状況の中で、長老たちは、その職務権能がもつ影響力を認識する必要がある。そこには、福音の裏切り、権力闘争、分裂、そして、ついには棄教を招くような職権乱用の危険性がある。キリストは仕えるために来られた（ルカ 22：27）。彼は権力の誘惑に屈しなかった。彼の十字架と復活をとおして、彼は支配と権力を無力にした。人々は今、聖霊をとおして、救済の自由と力を受けている。長老たちは、任職をとおして、キリストの支配のもとに移し置かれ、そして、誘惑の力に打ち勝てるとの約束を受けたのである。」ルーカス・フィッシャー『長老職：改革派の伝統と今日の長老職』吉岡契典訳（一麦出版社、2014年）、116-117頁。

ことが大切です。」³⁶

4. 変化とは新しい文化をつくること

①ケルデマン『Banner』May 2014「Why is change so difficult」より

「ある教会は、その教会がいかに新来者に対して冷たく、彼らを歓迎する心が足りないかということ指摘されることに疲れている。もちろん彼らは、教会に人が来てほしいと願っているのである。そしてついに、彼らは 2 億円をかけて、新来者を招くための完璧なフェロシップホールを、カフェラウンジと共に建設する。しかし、その施設の献堂式のあとになって、実は何も変わっていないということに気付くのである。新来者たちは、未だに教会のことを冷たく、閉鎖的だと感じてやまないのである。

また別の教会は、伝道の必要性についてとても真剣に考えている。それゆえ、教会の伝道プログラムを進めるためのスペシャリストを雇う。しかしその二年後、本当は何も変わっていなかったということに気付くのである。その教会の教勢は全く伸びていないのである。なぜか？

これらの教会はどちらも、技術的で表面的な挑戦(Technical Challenge)と、適応を伴う根本的な変化への挑戦(Adaptive Challenge)の区別を知らないからである。

技術的で表面的な変化の挑戦(Technical Challenge)とは、あなたが、手持ちの材料(リソース)と技術を使って、何かを修理することである。そして適応を伴う根本的な変化の挑戦(Adaptive Challenge)とは、それよりももっと難しいことである。それは、その組織の文化を変えることだ。それはつまり、その組織に根付いていて、その行動を決定づける、言葉にならないような考え方、感じ方、価値観、慣習を変えることである。適応を伴う根本的な変化は、魂の内側を探ることと、学び続けることを通して、私たちが何者であり、他の人々共に、どう生きるのかということそのものを変えることである。

なぜ、変わるといふことは、とても難しいことなのだろうか？それは、最も必要とされる重要な変化が、適応を伴う根本的な変化の挑戦(Adaptive Challenge)だからだ。それは単に、私たちは何をするかということではなく、私たちはどうやって、そしてなぜそれをするのかという、私たちの文化を変え、私たちの魂の内側を探るような問いかけに答えることによって起こる変化である。それは、私たち自身が変わることなのだ。

各個教会から教派的なあらゆる組織にわたる北米キリスト改革派教会(Christian Reformed Church North America)全体は、適応を伴う根本的な変化の挑戦(Adaptive Challenge)に直面している。それは、誰の失敗に拠るのでもなく、シンプルに、世界と、そして私たちの教派の中での変化が、それも深い変化が求められているゆえである。そして CRC は自らの進む方向性を見つけようとしている。

Technical Challenge	Adaptive Challenge
・変化が分かり易い	・変化が見えづらい
・それは簡単に解決を運んでくる	・価値観や関係性、取り組み方の変化が必要とされる。
・専門家によってもたらされる。	・教会員全員が問題の前に立たされて、そこで努力を強いられる。
・結果がすぐに表れる	・多くの経験と試練、失敗が不可欠であり、また互いに学び続けることが必要である。
例・来会者との交わりのためのホールを建設	例・外部の人の排除につながるような態度や

³⁶『教会実務を神学する：事務・管理・運営の手引き』（教文館、2021年）、177-178頁。

<p>すること。・求道者のための新来者用の学びのクラスを作ること。</p>	<p>慣習を正すこと。・教会員全ての信仰的訓練を目指すような文化を作り上げていくこと。</p>
---------------------------------------	---

Adaptive challenge をなすための 3 つのヒント

①希望を持つこと

Adaptive Challenge は、時に痛みを伴うが、しかしそれは、新しい命への入り口である。ヨハネによる福音書「12:24 はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。12:25 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」

②祈ること

神の様のお働きに期待し、神様から新しい道が示されることを祈ること。非常にしばしば、教会は、それは神様が求めておられないことであるにもかかわらず、教会形成を独力で、またただ機械的に行い、最新の経営テクニックや問題可決のスキルを用いて、諸問題を解決しようとする。しかし教会は、神様の前にひざまずき、神様のわざを仰ぎ見なければならない。

③自らの使命に焦点を合わせる

教会が自分の命を得ようとすることは、福音的生き方の逆を行くことである。その時教会は、自分の命を失ってしまう。しかし、キリストのゆえに自らの命を捧げる教会は、それを得る。目標は、組織を存続させるではなく、私たちが、自らの使命と、真のアイデンティティーを再発見することである。教会が、過去の組織形態から大きく形を変えることがあったとしても、神において命を見出す教会は、それを恐れるべきではない。

②全国青年リトリートに見た文化の芽生えと根づき

VII. 役員への献身の勧め

①長老・執事の資格：テモテへの手紙一3章。それは主の教会にもたらされる主にある親らしさであり、そこで奉仕者は、神の父としての教会とその民への御心（親心）を共有する祝福に与ることができる。そしてそれが、自分を信仰生活を守り大きく支える力となる。

②神様に用いていただくことのできる喜びと、その先に広がる、自分の殻を超えた大きな可能性

③献身・献金の恵み